様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７５９

研究課題名（和文）短期留学が英語オーラル・コミュニケーション能力と学習者の意識に与える影響

研究課題名（英文）The Impact of Short-Term Study Abroad Experiences on Japanese University English Learners' Communicative Competence and Perception

研究代表者
佐藤　陽子（SATO, Yoko）

法政大学・経営学部・教授

研究者番号：８０５２３１２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は３年間にわたり、英語圏への短期留学が日本人大学生の英語オーラル・コミュニケーション能力に与える影響を、学生とネイティブ・スピーカー試験官との対話式スピーキング・テストを用いて実証的に調査した。また、言語習得に大きく影響を与える、英語学習および異文化コミュニケーションに対する学生の意識の変化をアンケートにより調査した。その結果、（１）（グループとして）学生のオーラル・コミュニケーション能力は全ての項目で有意に向上したこと、（２）英語学習に対する意欲や異文化コミュニケーションに対する興味と意欲が促進されたこと、がわかった。

研究成果の概要（英文）：This three-year study investigated the impact of short-term study abroad (SA) experiences on the communicative competence of Japanese university learners of English. Pre- and post-test data were elicited through one-to-one, face-to-face oral proficiency interviews, each between a learner and a qualified native speaker assessor. Changes in the learners' attitudes towards English language study and intercultural communication were also investigated using a post-SA questionnaire.
The proficiency ratings showed that, as a group, the learners improved statistically significantly in all aspects of communication assessed in the study. The questionnaire survey indicated that the learners' motivation to study English and their interest in intercultural communication improved after the SA experiences.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：スタディ・アブロード　Study Abroad　短期留学　英語教育　オーラル・コミュニケーション　異文化コミュニケーション　第２言語習得

１．研究開始当初の背景

近年の経済・社会のグローバル化に伴い、国際的共通語としての英語によるコミュニケーション能力の重要さが指摘され、文部科学省は、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」（文部科学省, 2002）を打ち出し、英語でのコミュニケーション能力の向上が「我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている」とした。これを実現するための一手段として、Study Abroad（SA）プログラムと呼ばれる英語圏への短期留学が、全国の大学で盛んになってきており、これを反映するように、全国語学教育学会（JALT）でも、これをテーマに研究をするグループ（SA SIG）が平成 20 年に結成された。

ところが、このような短期留学が日本人の英語コミュニケーション能力に与える影響についての実態調査はいまだにほとんど行われていない。この背景には、信頼性・妥当性のあるオーラル・コミュニケーション能力の測定には、時間と労力、および訓練を受けた人材が必要であるため、なかなか実現できないことがあると思われる。が、短期留学の実際の効果を探るには、オーラル・コミュニケーション能力テストの使用が必須である。海外の先行研究では、留学前後のオーラル・コミュニケーション能力を測定し、比較したものがあるが、いまだに留学の効果について一致した結果は出ていない（DeKeyser, 2007）。

このような状況にかんがみ、筆者が「若手（スタートアップ）」の補助を受けて行った研究では、筆者の所属研究機関の短期留学プログラムに焦点を当て、ネイティブ・スピーカーと学生との対話式スピーキング・テストを使用し、pre-test/post-test デザインを用いて、オーラル・コミュニケーション能力の変化の測定を行った。ただし、調査規模が小さかった（n=24）ため、成果の一般化のためにはさらなるデータの蓄積が不可欠であった。また、言語習得に大きな影響を与えると考えられている、英語学習および異文化コミュニケーション等に対する学生の意識の変化を合わせて調査することの重要性も新たな課題として浮かび上がった。

参考文献

文部科学省（2002）『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

DeKeyser, R. M. (2007) Study abroad as foreign language practice. In DeKeyser, D. M (ed.) *Practice in a second language: Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology* (pp.208-226). Cambridge: Cambridge University Press.

Sato, Y. (2009, 30 May). *Possible impact of short experience abroad on Japanese EFL learners' socio-pragmatic competence*. Poster presented at the 9th Annual Conference of the Japan Second Language Association (J-SLA 2009), Chuo University, Tokyo.

２．研究の目的

本研究では、筆者が平成 21 年度から 22 年度にかけて「若手（スタートアップ）」の補助を受けて行った研究、「大学の短期留学プログラムが英語オーラル・コミュニケーション能力に与える影響」を発展させ、英語圏への短期留学が日本人大学生の英語オーラル・コミュニケーション能力に与える影響をさらに調査し、データを蓄積することによって成果の一般化を図る。また、上記の研究の成果をもとに改善した留学準備コースの有用性、および言語習得に大きく影響を与えると考えられている、英語学習および異文化コミュニケーション等に対する学生の意識の変化を合わせて調査する。これらを総合的に考察することにより、効果的な短期留学プログラムと準備コースのあり方を探る。

３．研究の方法

（１）23 年度は予備研究を行い、データ収集・分析方法の妥当性および信頼性を確立した。具体的には次のとおりである。

①当該年度の留学参加者計 27 名(中級レベル大学 2 年生英語学習者)に対し、留学直前および直後に、ネイティブ・スピーカー試験官によるインタビュー形式で、オーラル・コミュニケーション能力測定を行った。インタビューと評価尺度には、国際的に認められている対話式スピーキング・テストを基に筆者が自身の先行研究 (Sato, 2008) に基づいて作成したものが使用された。テストの様子は小型ビデオカメラで録画された。また、上記の学生による自己評価も行われた。前述の筆者の先行研究に基づき、オーラル・コミュニケーションに関わる要素別に、感じた困難の度合いが 5 段階で評価された。

②留学直後の上記の学生に対してアンケートを行い、英語学習と異文化理解、異文化コミュニケーションに対する意識の変化及び留学準備コースの有用性について調査した。

③これらのデータを分析したところ、研究方法の信頼性、妥当性、実行可能性が確認された。2012 年 2 月と 9 月には国際学会で途中経過が発表され、その後論文集に掲載された（下記 5 参照）。

Sato, Y. (2008). *Japanese university students' problems and communication strategies in EFL speaking: A descriptive*

study using retrospective verbal reports. Unpublished doctoral dissertation, University of Reading, Reading, UK.

（２）24 年度は、上記予備研究に基づき、当該年度の留学参加者計 28 名（中級レベルの大学 2 年生英語学習者）について主研究を行った。方法は上記の予備研究と同じである。

収集されたデータは順次分析され、2013 年 3 月には国際学会で途中経過が発表され、その後論文集に掲載された（下記 5 参照）。

（３）25 年度は、当該年度の留学参加者計 26 名（中級レベルの大学 2 年生英語学習者）について引き続き主研究を行った。方法は 23 年度、24 年度と同じである。

収集されたデータは順次分析され、2014 年 3 月には国際学会で途中経過が発表され（下記 5 参照）、その後論文集に投稿された。

４．研究成果
主な成果は次の通りである。

（１）ネイティブ・スピーカー試験官の評価：グループ全体として、留学後には測定された全ての項目において学生のコミュニケーション能力が向上した。また、留学前の到達度と留学後の伸びの間に負の相関関係が多くみられた。すなわち、留学前に到達度が低かった要素ほど留学後に向上する傾向があった。ただし、上記の結果は年度により差があり、個人差も大きかった。

（２）学生の自己評価：グループ全体として、留学後には英語でのコミュニケーションの難しさは減少した。項目別では、語彙を素早く思い出す能力、話の組み立て、文法、話す内容の適切さ、問題解決能力が全ての年度で有意に向上した。逆に、発音と発話の量の適切さについては、年度を問わず有意な向上は見られなかった。ただし大きな個人差があった。また、多くの項目について、留学前に感じた困難の度合いと留学後の変化の大きさの間に相関関係がみられた。すなわち、留学前に困難であった学生ほど留学の効果が大きかった。が、年度により、項目に違いがあった。

（３）学生へのアンケート：留学により、英語学習に対する意欲と異文化に対する興味が高まり、異文化理解が深まった。また、留学準備コースは有益で、特に異文化コミュニケーションやディスカッションなどの要素が有用だった。ただし、論文の書き方についての指導を増やしてほしいという声もあった。

これらの結果から、次のことが導き出された。

（１）日本において英語でのコミュニケーションの機会がほとんどない中級レベルの大学生学習者にとって、短期留学はオーラル・コミュニケーション能力を総合的に向上させる貴重な機会である。さらに、実生活で不可欠なコミュニケーション手段として英語を使用することにより、自身の能力向上の必要性を自覚し、英語学習に対する意欲が高まるようである。また、様々な国々の人々と交流することにより、異文化に対する興味が高まり、異文化理解が深まると期待される。

（２）留学の効果を最大限引き出すためには、事前準備が重要である。特に、異文化コミュニケーションや英語での会話やディスカッションの基礎など、学習者が現地で必要とする能力の下敷きを作っておくことが肝要と思われる。また、留学先の授業で必要となる論文の書き方の指導も行う必要がある。

（３）一方で、発音や 発話の量といった側面に対する学生自身は、今回調査したような 3－4 か月の短期留学で劇的に伸ばすことは難しいかもしれない。

これらの成果は短期留学の効果と効果的な留学準備プログラムについて多くの示唆を与えている。しかし、年度により、また、個々の学生間で結果に差があり、人数も毎年 30 名未満と小規模な研究であったので、今後はさらにデータを集め、年度差や個人差の原因を探るとともに、結果が一般化できうるものかどうかを検証していくことが必要である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Sato, Y. (2013). Short-Term ESL Study Abroad: Do Japanese Students Communicate in English More Easily After the Programme? The Proceedings of the Conference of the International Journal of Arts & Sciences. 6/2, 1-7. 査読有

② Sato, Y. (2013). Short-term ESL study abroad: Are Japanese students "more pleasant" to talk to after the programme? The Proceedings of the 45th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics. 219-224. 査読有

③ Sato, Y. (2012). Short-term English language study abroad experiences: How do they contribute to the development of Japanese university students' communicative competence? Conference of the International

Journal of Arts & Sciences. 5/3, 291-292. **査読有**

〔学会発表〕（計４件）

① Sato, Y. (2014, 3 March). Short-term ESL study abroad experiences: Do they reduce Japanese students' difficulty in oral communication in English? Paper presented at the International Journal of Arts & Sciences, Mediterranean Conference for Academic Disciplines, Grand Hotel Excelsior, Malta. **査読有**

② Sato, Y. (2013, 4 March). Short-term ESL study abroad: Do Japanese students communicate in English more easily after the programme? Paper presented at the International Journal of Arts & Sciences, Mediterranean Conference for Academic Disciplines, Grand Hotel Excelsior, Malta. **査読有**

③ Sato, Y. (2012, 7 September). Short-term ESL study abroad: Are Japanese students "more pleasant" to talk to after the programme? The 45th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics (BAAL 2012), University of Southampton, UK. **査読有**

④ Sato, Y. (2012, 20 February). Short-term language study abroad experiences: How do they contribute to the development of Japanese EFL learners' communicative competence? International Journal of Arts and Sciences, Mediterranean Conference for Academic Disciplines, University of Malta (Gozo Campus), Malta. **査読有**

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　陽子　　（SATO，Yoko）
法政大学・経営学部・教授
研究者番号：80523125